明治以降の妙蓮寺

小野三郎

仏教攻撃の嵐

江戸時代の終わり頃から「日本はもともと神の国であった」という思想が広まり全国的に仏教排除の嵐が吹き荒れた。寺院が壊され佛像や寺物・経典が売られたり焼かれたりした。僧侶は還俗（げんぞく）する人、神官・警官・兵士になる人もあった。鹿児島県には多数の首無地蔵が残っている寺がある。

明治の初め県下でも百姓一揆が頻発した。明治五年、庄内に始まり大分に向かう沿道の農民を巻き込んだ大規模な百姓一揆があった。一揆は農民負担の軽減であったが、その三番目に「神仏これまで通り」を掲げている。一番は「牛馬を殺すな」二番は「神木を伐るな」であった。牛馬、神仏なしでは農民の暮らしは成り立たなかったのである。

神仏分離令は明治政府が「神」中心の国造りを焦るあまり農民の実状を無視した厳しいものであった。初めの三項目は認められたが他はすべて保留（拒否）となった。この一揆の処分は四名の死刑を含む厳しい刑罰と県の民費（人民の負担する費用）の二・四倍の重い罰金が課された。

このような国の政策のなかで明治五年、妙蓮寺は檀家がなく、住職がいないとの理由で廃寺となった。激しかった仏教攻撃は明治九年頃になるとようやく弱まり、明治十二年妙蓮寺は再興を許された。再興時の妙蓮寺は二間三尺四方（約六坪）の小さな本堂と約三十坪の庫裏、信徒六十二人、耕地約六反、山林八畝の寺であった。（上申書・明治二十三年）

いま、妙蓮寺の仏像や地蔵に故意に壊された跡は見当たらない。時の為政者のはからいで被害を免れたのであろう。

本堂の建立

資産台帳の記録によると本堂の建立は百二十年前の明治三十年頃となる。明治二十三年の妙蓮寺からの上申書には新しい本堂の記載がない。明治二十八年に「青雲山妙蓮寺中興縁起」の写しが作成され、順明住職の署名がある。本堂が完成したので改めて寺の由緒を明らかにしたと思われる。寺に残っている「御籤筥」の箱書きに「明治十九年当山現住市原順明」の名がある。これらを推測すると本堂の建立は明治二十四年から三十年までの間の二十五年頃で順明住職時と推定される。順明住職は明治十九年二十七歳で既に住職になっている。その時、兄の順開は三十三歳である。若くして座を譲ったのは何らかの理由があったのであろう。

本堂は約三十五坪（六・五間×五・五間）で格天井（ごうてんじょう）造りの天井には約四〇センチ角の板に絵や文字が描かれた絵馬が飾られていた。取り壊しの際破損した絵馬は処分した。縁故者が持ち帰ったものもある。現在保管されているのは八十三枚である。絵馬には明治のはじめ生まれの油布又五郎さんから大正初期生まれの牧歌子さんの名前がある。随時追加や補充をしたのであろう。奉納者の地域分布は

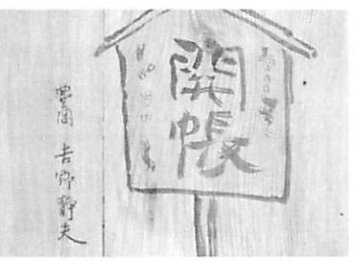
妙蓮寺略年表（明治～平成）

西暦	年号	国	妙　蓮　寺	役員	住職
1868	明治元	神仏分離令	廃仏毀釈運動　幕末から明治９年頃まで		順開
1872	5	廃寺	無住職、無檀家により		順明
1879	12	再興許可	本堂（2.5間×2.5間）		三位
1892	25？		本堂建築（瓦葺、約35坪　6.5間×5.5間）格天井絵馬 信徒62人		大12
1912	45		カタ夫人顕彰碑建立 格天井絵馬追加？		
1927	昭和２		大師堂建築（瓦ぶき、約14，5坪　本堂横） 本堂屋根ふき替え		
1947	22	農地改革	寺の寺領減る この頃より本堂は古野公民館		志賀淳良
	31		143番地山林474　取得		
1957	32		福田　陽繁氏より146番地寄贈		
	43		140－1番地山林151　　取得		
1970	45		本山へ贈与（146番地　147番地）		
1974	49		古野自治公民館建設（146番地）		
1976	51		経堂造立	後藤積信	
1981	56		妙蓮寺略縁起　奉納		昭56
1982	57		負担金拠出　（１戸1000円　80戸）		
1983	58	道路拡幅	境内分筆売却		
1984	59		お札販売（１枚100円　87枚）	油布雅雄	市原良明
1994	平成６		ご神木不法売却　　寺物散逸		
1997	9		カヤの木植樹　（安東久人　後藤薫男）		
1998	10		涅槃図修復　（３月） ご本尊プレハブへ　（８月23日　参拝19人） 本堂取り壊し　（９月９日） 早朝より整理、陰陽師許し状発見　（９月10日）	後藤薫男	平12
1999	11		地蔵尊開眼供養（１月25日） ＯＢＳ「やせうま」取材		稙田恵秀
2006	18		市原カタ顕彰碑修復		
2017	29				平29 秋吉文隆

表のようになっている。古野や周辺に信徒が多いのは当然であるが小野鶴、大分方面、また日出町の豊岡まで広がっている。古野老人会のまとめた「古野の歴史」には大野、大神の地名が見える。

絵馬奉納者の分布

	枚数	%
古野	36	43
来鉢	8	9
大分	7	8
小野鶴	6	7
赤野	6	7
野田	4	5
北方	3	3
下市	2	2
東院	2	2
宮苑	1	1
三船	1	1
朴木	1	1
山田	1	1
丸田	1	1
豊岡	4	5
計	83	



市原カタ夫人顕彰碑

妙蓮寺交差点のすぐ側に高さ二四〇センチの市原カタさんの顕彰碑がある。碑には世話人・男十二人、賛同者・女百二十二人の名前が刻まれている。カタさんは専門学校で高度な裁縫技術を学び、順明住職の内室になると妙蓮寺を伝習所にして裁縫を教えた。カタさんは裁縫だけでなく礼儀作法や生活の知恵など女性・人としての生き方まで幅広く指導したと思われる。多くの人が碑の建立に賛同しているのはカタさんの指導で女性が向上したことを誰もが実感したからであろう。カタさんはみんなから慕われ、感謝され、尊敬される先進的な女性であった。

大師堂の建て増し

昭和二年、本堂の西に本堂と部屋続きの大師堂（一四・五坪）を建て増している。カタさんの指導を望む生徒が多く、日常的に本堂が手狭になったのであろう。また、カタさんの評判の広まりと共に参詣者が増え施餓鬼会等の際本堂に人が溢れたのであろう。

この年に本堂の屋根をふき替えている。この前後が妙蓮寺の最盛期だったと思われる。

妙蓮寺の施餓鬼会

施餓鬼会の日（旧暦七月二十四日）の午前零時、年に一度の地蔵尊の扉が開く。信徒は二十三日から詰めかけ深夜の開扉を待って地蔵尊を崇拝しそのまま夜を明かす。参拝者には、「やせうま」とご飯（握り飯？）の夜食が供された。賄うのは小字単位に編成された賄い組の人たちである。参詣者は一年ぶりに膝を接し夜食を食べながら作柄や世間話、情報交換などの話がはずみ、互いに人の温かさや繋がりを感じたであろう。夜が明けると施餓鬼会にお参りして夏作物の収穫をよろこび、秋の稔りを願うとともに自然の恵みと祖霊に感謝して心の安らぎを得ていた。

戦時中の妙蓮寺

仏教界も戦争への協力を強いられた。兵器や弾丸を作るためつり鐘や金属類は供出させられた。仏教界が軍に戦闘機を献納している。このような時代であるから記録はないが妙蓮寺も他の寺院と同様に戦死者の戒名に「院」「居士」の号を贈ったであろう。また、先の

尖った神道式の墓石を墓地の優良場所に建てるよう口添えをしたと思われる。

戦後の妙蓮寺

農地改革（昭和二二～二五）で寺の農地は小作者にわたり小作料が入らなくなった。戦後の超インフレと食糧不足のなか、寺の収入は当てにならず住職夫人ノリヱさんの年金に頼る厳しい生活であった。戦後は多くの人が栄養不足であった。淳良住職はみんなの栄養を補う助けに優良な牡山羊を導入し山羊の繁殖をはかった。私も牝山羊をリヤカーに乗せて妙蓮寺まで運んだ。当時妙蓮寺の庭は山羊の鳴き声で賑やかであった。

戦後は宗教心が薄れ、さびしい本堂であった。本堂は戦前から村の寄り合いの場であったが戦後は地区の公民館となり、戦後社会の変化に対応する知識・能力等の習得の場となった。地区総会、農業に関する各種会合、行政の説明会、婦人会、青年団等々の会合、研修が行われた。妙蓮寺本堂が公民館であった期間は戦後から昭和四十九年まで二十九年間続いた。

古野自治公民館の建設

由布川小学校は一時期廃校の危機にあったが医科大学開学の前後から団地の造成、アパートの建設がすすみ人口が増え、より広い公民館が必要になった。新公民館は挟間中学校の旧校舎解体材を使って昭和四十九年妙蓮寺の境内に建てられた。以来、公民館は四十二年間古野地区発展に寄与して来た。バイパス道路の開通により人口が急増した。より大きな施設が必要になり古野自治公民館は役割を地区交流センターに譲り、平成二十九年春に取り壊された。

無人の寺へ

ノリヱ夫人は昭和五十一年に死去し、淳良住職が五十六年に入寂すると寺は無人になった。後任の住職は妙蓮寺と血縁がある京都在住の市原良明氏である。良明住職は三十三間堂の役職を務めた人であるが事情があって妙蓮寺に戻らなかった。したがって淳良住職入寂後は無人の寺となった。

良明住職になって昭和五十八年に道路拡幅のため境内を分筆売却している。役員の後藤積信氏は書類作成のため何度も京都の市原氏を訪ねている。また大分市の法務局へ度々出向いている。この前年古野の全戸が一戸千円を拠出している。売却に伴う役員の交通費や書類作成費等に充当したのであろう。

寺が無人になるといろいろな事件が発生する。全国的に無住の寺の仏像や寺物の盗難が報じられている。妙蓮寺でも平成六年神木の売却事件があった。公民館の横に二十万円（資産台帳・平成元年）の銀杏の巨木があった。万一、倒れれば被害が生ずるので市原住職は銀杏の伐採を了承した。ところが、当時の役員は銀杏とともにご神木の榧（かや）の木（切り口の長径八〇×短径七二㎝）を住職に相談なく売却した。伐採作業を見た人は高価な榧のご神木を売って本堂の修理費に当てると思っていた。しかし、会計への入金は二十万円であった。平成元年の資産台帳では榧の木の評価額は不詳となっている。これは稀少価値がある高価な榧は素人には価格の算定ができなかったのである。東京オリンピックの頃既に碁盤のとれる榧は極め

妙蓮寺住職略系図

中興二世

市原　順開 1853～1906
嘉永 6～明治 39
享年 53 歳

市原　順明 1859～1925
安政 6～大正 14
享年 66 歳

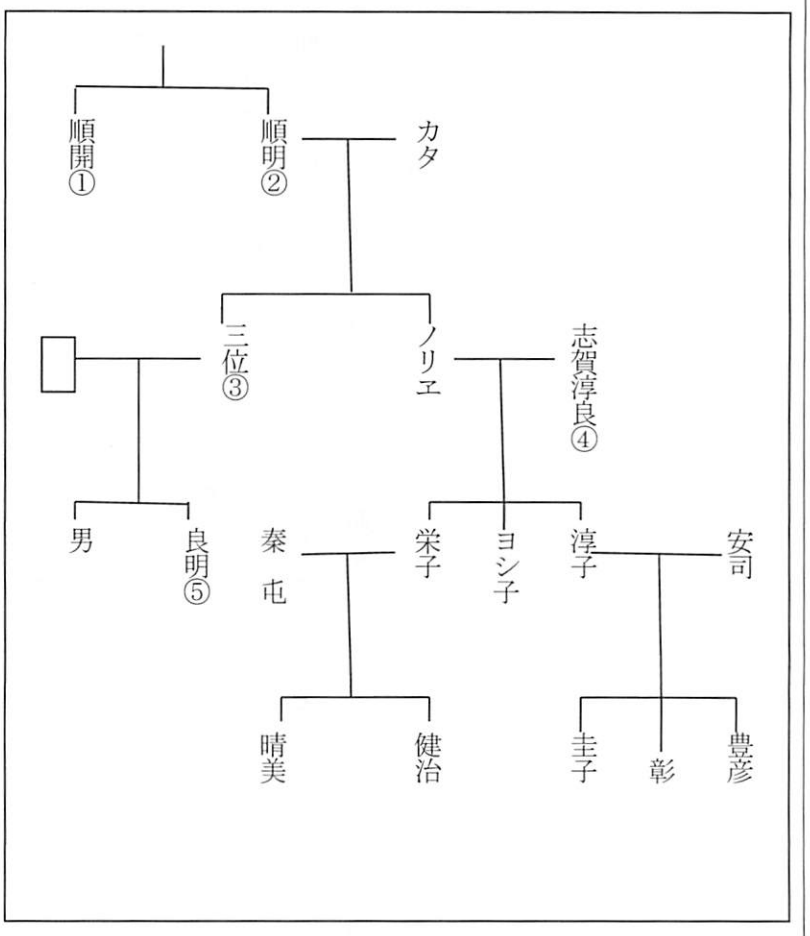
市原　三位 1888～1923
明治 21～大正 12
享年 35 歳

志賀　淳良 1900～1980
明治 33～昭和 56
享年 80 歳

市原　良明 1919～2000
大正 8～平成 12
享年 81 歳

稙田　恵秀（霊山寺）
平成 29 年まで

秋吉　文隆（文殊仙寺）



築後約100年（平成７年）

て入手困難であった。（当時の湯平営林署長牧原氏）「榧と銀杏で二十万円は安すぎる」との噂に対して不法売却した役員は偽文書を出した。偽文書は「市原住職が役員会で榧の木は枯死寸前であるから伐採したいと提案し、可決した」との内容であった。売却価格については一言も触れていない。その後も売却経緯や売却価格は不明のままである。

一部には地区が長い間妙蓮寺を守ってきた故「寺のことを地区が決

めても許される」と考える人がいる。しかし、この事件の場合はどうであろうか。この事件をきっかけに寺側と地区の信頼関係は壊れ、賄い組の組織も機能しなくなった。

本堂の取り壊し

無人になっていつの間にか本堂の「雷」の掛け軸が無くなった。屋根の雨漏りは広がった。仏像・仏具・経典・備品等の傷みを防ぎ安全に保管できる場所の確保が急がれた。役員の後藤薫男氏の尽力と福田建設社長さんの好意でプレハブが短時日で設置された。本堂の取り壊しも決まった。経費は道路拡幅用に売却した土地代を当てた。平成十年九月十日、早朝から六人で本堂の整理作業を始めた。四人が本堂から運び出し、庭の二人が火に投げ込む。少々疲れた時、埃まみれの古い箱を手渡された。蓋を取ると古く広い厚い紙に何か書いてあるが内容は判らない。歴史資料館に届けると「陰陽師許状」であることが判った。整理をする人数が少なかったため品物の見極めが不十分であった。貴重なものを焼却したのではないかと後悔の念が残っている。

プレハブに移ってからも一月の地蔵様祭り、八月の施餓鬼会は続いている。プレハブの掃除や飾り、祭りの時の賄いは後藤薫男氏夫人のヨシノさんが二十年間中心になってすすめてきた。数年前から妙蓮寺と縁故のある秦さんが掃除や飾りに加わった。寺を大事にする気持ちは同じであるが後藤氏と秦氏に見解の相違があり後藤氏は平成二十九年八月で役員を辞任した。

おわりに

妙蓮寺は創建以来多くの人々がお参りして心の安らぎを得ると共に日常生活の厳しさを忘れてストレスから解放される場であった。また、人々が集まってくらしの維持・向上の話し合いをする大切な場であった。

このように人々の心とくらしを支えてきた妙蓮寺が現代的な役割を果す寺として再建されることを願っている。

参考資料

妙蓮寺資産台帳
妙蓮寺金銭出納簿
妙蓮寺住職位牌

参考文献

廃仏毀釈百年　佐伯恵達
寺院消滅　鵜飼秀徳

妙蓮寺の涅槃図

涅槃図は涅槃会（二月十五日・釈迦入滅の日）のとき、壁などに掲げて拝観する。壁などに掛けるため普通は縦長である。妙蓮寺の様な横長の涅槃図（縦六〇×横一二〇センチ）はあまり見かけない。寺の造りに合わせて制作されたと思われる。また、太陽が描かれている涅槃図は珍しい。通常は月のみで太陽は描かない。

作品は小ぶりであるが大へん細かく丁寧に描いている。幅広く研鑽を積み、高い技術を持った人が描いている。寺の何らかの節目のおりに制作されたのであろう。（歴史博物館・高宮なつ美氏談）

「涅槃図」箱書き

表　「涅槃像　一幅」

裏　「惟時寛政十二年庚申春調之　京大仏并由原山金蔵院青雲山妙蓮寺什物妙禅房代
　　お世話人　現在
　　想邑中志宮様也
　　久兵衛　并毘沙門天世話人
　　世話人　想若者中代金壹両壹歩　磯右衛門妙禅房
　　元右衛門　代金壹歩三百文　」

・惟時（これとき）このとき即ちこの涅槃像を書いた時または、寄付したとき。
・寛政十二年は、一八〇〇年である。
・「春調之」春これを調う。
・「御世話人　宮様也」は、御世話人としては、由原宮がこの涅槃図を世話してくれたという意味である。
・「京大仏并由原山金蔵院」の関係は今後の課題。
・由原神社には、金蔵院という本院がありそこの中の本院が妙蓮寺という意味。
・什物（じゅうぶつ）とは、寺の所蔵物の事。
・妙禅房は、その時に妙蓮寺に住んでいた僧であろう。この人が邑（むら）の代表になっていたであろう。
・「想邑中志（そうそんちゅうし）」は、村中の有志という意味であろう。
・「想若者中」は、想若者中である。其の世話人が久兵衛と元右衛門である。
・毘沙門天は、多聞天と訳され財宝富貴の神、あるいは、軍神として信仰される護法善神。この時、涅槃図とおなじときに

毘沙門天も世話人である磯右衛門と妙禅房によって納められた。
・歩は普通分と書くところである。
この箱書きは、簡単であるが、由原八幡と妙蓮寺の関係を表す貴重な資料である。即ち、妙蓮寺は由原宮今蔵院の本院であった事を示している。（二宮　昭二）

涅槃図部分